

当院の抗酸菌検出状況と耐性傾向について

小澤 浩平, 高田 耕自, 岡田 都史, 森脇 貴美, 酒井 寛
(独立行政法人国立病院機構和歌山病院)

【目的】再興感染症としての結核は、集団感染の増大や多剤耐性結核菌の出現など新たな問題を含んでいる。多くの検査室では結核診断をより効果的に行うため、集菌法による検出率の向上と液体培地による迅速報告へと検査体制を移行させてきた。今回、当院における抗酸菌検査の現状について解析し、幾つかの知見を得たので報告する。

【方法】2000年1月から2003年12月までの間に抗酸菌検査の依頼を受けた検体を対象とした。検査材料は粘液溶解剤を加えて遠心後、沈渣を蛍光染色法にて鏡検し、培養は雑菌処理した後液体培地および小川培地に接種した。培養にて陽性を示した検体は抗酸菌染色にて陽性を確認し、同定・感受性検査を実施した。

【結果】1)抗酸菌塗抹および培養検査：依頼検体の総件数10,089件で年平均2522件であった。塗抹陽性数および塗抹陽性率は、それぞれ年平均512例、20.1%。培養陽性数および培養陽性率はそれぞれ年平均567件、22.1%であった。件数および陽性率ともに年次ごとに減少の傾向を示した。

2)菌種別結果：菌種別の年平均検出率は、TBは66.8%、

M. aviumは11.3%、M. intracellulareは18.4%、その他は4.2%であり、M. intracellulareは2003年に25.2%と増加がみられた。

3)感受性検査：感受性検査総件数は41件、年平均103件で、薬剤別の年平均耐性率はINH:20.2%、EB:11.6%、SM:10.1%、RFP:8.2%であり、INHとRFPの耐性率が増加傾向であった。多剤耐性結核菌検出率は年平均3.4%であったが、2003年は7.4%であり増加傾向を示した。

【結語】過去4年間に実施した結核菌検査において検体数、検出率、感受性試験の現状について解析した結果、件数、塗抹陽性率、培養陽性率は減少の傾向を示した。菌種別検出率の解析においては、TBの分離数が年次ごとに減少を示した。M. intracellulareにおいては2003年に分離割合の著しい増加が見られた。薬剤耐性率においては年次ごとに耐性率の増加を認めた。多剤耐性結核菌は例数が少なかったが、増加傾向を示し特に2003年は急増した。